説教20220703「何を喜ぶか」イザヤ66：10-16　ルカ10：13-20

喜びというのは、素直なもので、今ここで自分が喜んでいることは誰にも否定できない事実であって強みであります。今日のルカ福音書でイエス様は、そのように今ここで喜んでいる72人の弟子たちに向かって「喜んではならない」と言われました。今、目の前で喜んでる人に「喜んではならない」と普通の人が言ったとしても、どうでしょうか、その人は聞く耳を持たないかも知れません。

喜んでいるということは、私たちが日々を歩んで行く上でも大変大切な心の在り方です。今ここで喜ばないで、明日喜ぼうですとか、あそこに行ったら喜ぼうなどと言い続けている人は、ひょっとしたらうつ病にかかってしまうかもしれません。

その点、赤ちゃんというのは、今ここで喜ぶように造られていますので、そんな余計な考え方はしないのです。イザヤ書６６章12節に「あなたたちは乳房に養われ／抱いて運ばれ、膝の上であやされる。」と書いてありますが、これは赤ちゃんが母親に抱かれて喜んでいる姿を描いています。

では、今ここに喜んでいることを、大人が実行する為にはどうすればよいのでしょうか。残念ながら私たち人間はいつまでも母親の腕に抱かれて喜んでいるという様に作られてはいません。時が来れば、独り立ちをして、自分で喜びを見出し、そして最後には母親を喜ばす存在になるように造られていることでしょう。

でも、大人が今ここで喜んでいる姿というのは赤ちゃんの様に一様ではなく、ほんとうにたくさんの様態がありますね。中には、イエス様のみならず誰から見ても、「おいおいそんなことしていてはいけないよ、」ととがめられるような喜びにふけってしまう人たちもいます。ですから今日の説教題にしました「何を喜ぶか」という、喜んでいることの中身を問うことは、重要なことだと言えるでしょう。

聖書は、喜びについて多くのことを語っています。その喜びを一言でいれば主の喜びであります。主イエスを礼拝して賛美する喜びであります。その在り方はネヘミヤ記において次の様に告げられています。「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」これは、今の私たちが今ここで捧げる礼拝に引き継がれています。

つまり主イエスを礼拝賛美する喜びというのは、今ここでの喜びであると同時に、最後の最後まで引き継がれていく、永遠の喜びであり、又人々に語り知らされ分かち合える大きな喜びであると言えるでしょう。

私たちは、「何を喜ぶか」と問われれば、この主イエスの喜びこそそれであると答えるべきです。しかし、未だイエスキリストを信じていない方には、主イエスの喜びと一言で言われてもピンとこないかも知れませんので、更に語っていきたいと思います。テサロニケの信徒への手紙二には、その主イエスの喜びが多く語られています。どういう風に語られているかといいますと、私たちは人に喜ばれるようにではなく、神に喜ばれるために生活しなさいというように書かれています。そして神であるイエスキリストの前でいつも喜んでいなさいとも記されています。つまり私たちは、常に主イエスと生活を共にして、主イエスを喜ばせ、その喜びを私たちも共有しながら、生活をしていくのです。その時、今ここにある喜びは、永続的で広がりのあるものとなるでしょう。

さて、この様に主イエスの喜びというのは永続的に引き継がれまた広がっていく者ですが、聖書にはその喜びが最後の最後に完成するときのことが記されています。それが、新しいエルサレムという言葉で語られる新しい天地の完成の時でありますが、その有様は最も有名な聖書箇所では、ヨハネ黙示録の21章の「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」になります。そこでは永遠の喜びが成就し、私たち人間はそこに入れられるのです。又、今日のイザヤ書の箇所も新しいエルサレムのことを示しています。「エルサレムと共に喜び祝い／彼女のゆえに喜び躍れ／彼女を愛するすべての人よ。彼女と共に喜び楽しめ／彼女のために喪に服していたすべての人よ。

彼女の慰めの乳房から飲んで、飽き足り／豊かな乳房に養われ、喜びを得よ。

主はこう言われる。見よ、わたしは彼女に向けよう／平和を大河のように／国々の栄えを洪水の流れのように。あなたたちは乳房に養われ／抱いて運ばれ、膝の上であやされる。

母がその子を慰めるように／わたしはあなたたちを慰める。エルサレムであなたたちは慰めを受ける。」

このイザヤ書では、今ここにある喜びということに焦点を当てて描写しているようです。又、これだけを読めば、最後の永遠の喜びというのが、結局、原初的な母と子の固着の世界に戻ることなのかと思わせられます。確かに、最後の完成の時が、初めに造られた善き被造世界への立ち返りという様にとらえることも出来ます。しかし、それに加えてその喜びの世界は永遠となり又大きく拡がっている事にも私たちは心を留めたいと思います。新しいエルサレムにおける喜びとは、母と子の二人だけの今ここにあるこの上ない喜びの時でありつつ、その喜びが全ての人、全ての時間、全ての被造物と分かち合えるほどに完成しているのです。その有様は、イザヤ書/ 65章 25節に記されています。

「狼と小羊は共に草をはみ／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。」

赤ちゃんと蛇とが戯れ喜びを共に出来るような世界がここには描かれています。果たしてそんな世界が実現可能なの？と私たち人間はいぶかしく思うことでしょう。そう思うことは正しいことでしょう。なぜならば、この様な完成した世界を作り出せるのは神様である主イエス以外にはいないからです。

さてこのような主イエスの喜びに私たちも入れられたいと思いますが、そのためには、主イエスを信じ、常に主イエスと生活を共にして、主イエスの御言葉に耳を傾けることが必要です。そのように願う私たちに、今日のルカ福音書の御言葉は、ひょっとしたらつまづきにもなりかねませんので、私たちは固く主イエスに信頼して、御言葉を聞いて参りたいと思います。

この72人という数は、12人の弟子に増し加えられた弟子の数で、プロテスタント教会の用語を用いれば、万人祭司である教会の全員に向けてイエス様は語っておられるのです。「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところでなされた奇跡がティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない。・・・また、カファルナウム、お前は、／天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。」このように主イエスはコラジン、ベトサイダ、カファルナウムに対して厳しく叱られていますが、この３つの町というのは、殊にイエス様に敵対的であったというわけではないのです。むしろイエス様に聞き従ってきた街々であったのです。しかし、イエス様はそんな街に対して厳しい言葉を語られました。それはこの街々が聞く耳を持っていたからこそ、イエス様は厳しい言葉を語られたのでありましょう。

１７節からの７２人の弟子たちに対しても、同様にイエス様は厳しい言葉を語られます。喜んで帰って来た72人に対して「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。」と言われます。私たちはこの御言葉を聞いて、主イエスから任された務めを、つい自分の業績としてしまう、自分の傲慢さに気付かされることでしょう。私たちは、常にイエス様と生活を共にしていても、自分を誇るという罪な傾向を逃れることが出来ません。一例をあげれば、この教会がこんなに栄えているのは、この私が大きく貢献したからだなどと思って、自分の力を誇ったりするのです。しかしそれは大きな間違いであることは言うまでもありません。でも私たちはそれをやってしまうのです。

不思議なことで、イエス様への信仰が深まり、常にイエス様と歩むようになればなるほど、私たちはこの様な間違いを犯してしまう機会に多く遭遇することになります。でもよくできたもので、イエス様への信仰が深められた、私たちは、イエス様からこのようなお叱りの御言葉を聞いても、それを素直に受け止め従うことが出来るようにされるのです。決して、厳しい御言葉だから逃げてしまおうなどとは思わなくなるのです。そもそも信仰が深くなるということは、この様な幾多の危機を経験していくということでありましょう。

自分を誇ること、それを自分の喜びとするのがそんなに危機なのであろうか、と思われる方がおられるかも知れません。しかし、私たちは、自分を誇りだし、その自分を誇る喜びが大きくなってきますと、その喜びは、主イエスを喜ぶ喜びを妨げるようになるでしょう。ですから、それは本当の喜びから反れていく危機であると言わざるを得ないでしょう。

幸いなことに主イエスは叱責ばかりではなく、私たちに、永遠の喜びに至る指針となる御言葉を恵んで下さっています。「むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

私の名が、新しいエルサレムの一員として記されているそのことを、イエス様はこの様に御言葉によって保障して下さっています。それはなんと喜ばしいことでしょうか。私たちは「何を喜ぶか」と問われた時に、迷うことなくこちらを選ばなくてはなりません。しかし、それは、イエス様を信じて聖霊の導きによってでないと選びきれない選択です。

生まれたばかりの赤ちゃんは今ここにある母親の愛情に満ちた腕に抱かれることを選びます。では、クリスチャンの今ここにある喜びとは何でしょうか、それは主イエスの前にへりくだって、主イエスこそをほめたたえる礼拝の時であります。

今ここにある礼拝の喜びが、新しいエルサレムでの永遠の喜びにつながっている、そしてその喜びは全ての人と分かち合うことが出来る、この喜びは、将に人には考え付くことも生み出すことも出来ない主イエスの喜びであります。私たちは、その主イエスの喜びを語り伝えるために召し出されています。その務めも又、主イエスの喜びの一部であります。それは決して、自分を誇ることの喜びではありません。私たちは、新しいエルサレムで主イエスの喜びが完成するときを目指して、この地上生涯を送っているのです。

喜びというのは深められていくものです。未だ「むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」とイエス様から言われてもそんなに喜べないと思われている方も、これから、その主イエスの喜びを、共に深めて参りたいと願います。

祈ります

父なる神

あなたはこの地上にも、母が、我が子をいつくしむような、愛に満ちた教会を建てて下さり、天上にある教会へ入る道を私たちに保証してくださいました。その大いなる恵みに感謝し、あなたを褒めたたえます。

私たちが、あなたの前にへりくだり、あなたを賛美する歌声を響かせることが出来ますように。

今の世は、自分の力や能力をほめたたえる風潮に満ち、それによって多くの人々が悩み苦しみ、かえって喜びを見出せず、辛い日々を送っておられます。どうか、その方々があなたに向かって、その苦しみを告白し、嘆き悲しみ、そしてあなたに癒され、あなたの喜びの内に歩んで行くことが出来ますように、この世を聖霊で満たして下さい。

私たちも聖霊に満たされて、主の喜びを隣人に告げ知らせる喜びの業を行っていくことが出来ますように。

最後の時に、私たちのうぬぼれ、自己過信は何の役にも立ちません。どうか私たちが、この世にある時から、そのことを悟らされ、御子キリストに引き寄せられ抱かれる永遠の喜びを、この世にあって伝えていくことが出来ますように。

父と聖霊とともに一体であり